

〈研究ノート〉

「なまよみの甲斐」補考

A Supplementary Consideration on “Namayomino Kahi”

鈴木 武晴

SUZUKI Takeharu

一、序

万葉集の高橋連虫麻呂歌集所出歌で、虫麻呂の作と認められる「富士の山を詠む歌一首并せて短歌」(巻三・三一九～三二二番歌)の長歌三一九は、「なまよみの甲斐の国」(原文「奈麻余美乃甲斐乃国」)の表現から始まる。その枕詞「なまよみの」の語義と「甲斐」への懸り方については、すでに二本の論文において、また拙著『甲斐 万葉の歌譜』の中で詳細に論じた。そして、「なまよみの」は「並吉み」で、「山々の並べ方(排列)のすばらしいところの」の意をもつて「甲斐(交ひ)の国」(山々が幾つも交叉し重なって続いている国の意)にかかるとを明らかにした。

本小稿では、補考として、高橋虫麻呂の歌の用語との関連を考察して、一連の考察の筆を擱きたいと思う。

二、高橋虫麻呂歌の「並む」

高橋虫麻呂は赴任していた常陸の国(現茨城県)を検税使として訪れた「大伴卿」(大伴旅人と覚しい)を見送る「鹿島の郡の刈野の橋にして、大伴卿と別るる歌一首并せて短歌」(巻九・一七八〇～一番歌)を詠み成している。その歌に、大伴卿の乗る御船が漕ぎ出して行つたあとに残る者たちが大伴卿を恋慕う様子を想像して、「浜も狭に 後れ並み居て 臥ひまろび 恋ひかも居らむ 足ずりし 音のみや泣かむ」と詠んでいる。「並み」の原文「奈美」「美」は『万葉集略解』による妥当な補字)で、四段活用「並む」の連用形を表わしている。先師伊藤博著『萬葉集釋注五』には、「並む」は多数のものが勢揃いする意。一七五三「二並ぶ」参照。」と記している。

三、「二並ぶ筑波の山」

巻九・一七五三番歌は、高橋虫麻呂が先述の「大伴卿」を案内して筑波山に登った時の「検税使、大伴卿が筑波山に登る時の歌一首并せて短歌」(一七五三～四番歌)の長歌で、掲げれば次のとおり。

衣手常陸の国の 二並ぶ筑波の山を 見まく欲り君来ませりと
暑けくに汗掻き投げ 木の根取りうそぶき登り 峰の上を君に
見すれば 男神も許したまひ 女神もちかはひたまひて 時とな
く雲居雨降る 筑波嶺をさやに照らして いふかりし国のまほ
らを つばらかに示したまへば 嬉しみと紐の緒解きて 家の
ごと解けてぞ遊ぶ うち靡く春見ましゆは 夏草の茂くはあれ
ど 今日の樂しさ

夏の登山詠のルーツで、「暑けくに汗掻き投げ 木の根取りうそぶき登り」と、登山の様を活写している(上掲拙著『甲斐 万葉の歌譜』第34章)。

「二並ぶ」については、先掲『釋注』に、

筑波山は、西側の男体山(八七〇メートル)と東側の女体山(八七六メートル)とが並び立つのでいう。「並ぶ」は、多数のものが勢揃いする「並む」(一七二〇参照)に対して、二つのものが並ぶことをいうのが習い。

と注している。

虫麻呂は、「上総の周准の珠名娘子を詠む歌一首并せて短歌」(巻九・一七三八～九番歌)の長歌一七三八に、「……さし並ぶ隣の君は……」と詠み、「菟原娘子が墓を見る歌一首并せて短歌」(巻九・一八〇九～一八一一番歌)の長歌一八〇九に、「葦屋の菟原娘子の 八年子の片生ひの時ゆ 小放りに髪たくまでに 並び居る家にも見えず……」と詠んで、「並ぶ」の語を用いているけれども、「二並ぶ」は、筑波山の山容の表現であるので、当面の考察にとつて極めて重要である。「富士の山を詠む歌」の長歌三一九の「並吉みの」は、虫麻呂が筑波山の山容を表わす「二並ぶ」の表現を基に考案した枕詞と考えられるからである。

このことに合わせて、虫麻呂が「筑波山に登る歌一首并せて短歌」(巻九・一七五七～八番歌)の長歌一七五七に、「……筑波嶺の吉けくを見れば 長き日に思ひ積み来し 憂へはやみぬ」と歌い、形容詞「吉し」を用いていることも重要である(「吉けく」(原文「吉久」は「吉し」の未然形の古形「吉け」に接尾語「く」が付いたもの)。

以上のような自作の用語例を下地として、虫麻呂は「並吉みの」の枕詞を生み成したと考えられる。

高橋虫麻呂の歌の二例の「並む」は、四段活用自動詞の「並む」であるのに対し、「並吉みの」の「並」は、下二段活用他動詞「並む」の連用形「並め」の、名詞化した「並」が、「天」↓「天」に音が変わるのと同様に「並」と音韻変化した語である。

このことについては、先掲虫麻呂歌一七五三に、四段活用他動詞「解く」の連用形「解き」と、下二段活用自動詞「解く」の連用形「解け」が用いられていることが参考になる。

四、二並ぶ筑波の山の国「常陸」と、富士の山のそびえ立つ連山の国「甲斐」と

『常陸国風土記』には、新穀祭の日の祖神の尊の宿請ひに対する富士の山と筑波の山の対照的な反応を記した説話が収められている。虫麻呂はむろんこのような説話を知っていたであろう。その知見の上に立って、筑波の山と富士の山、筑波山のある常陸の国と、富士山のある甲斐の国の双方の風土的景観を客観的に比較して捉える目を持っていたのである。すなわち、「常陸の国」は二並ぶ筑波の山が平野に突出している国であり、「甲斐の国」は駿河の国との境界に富士の山がそびえ立つ連山の国であるとの客観的認識が、「並吉みの甲斐（交ひ）の国」の表現を生み出したのである。

(二〇一九年九月二十三日)

注

1 a 「なまよみの甲斐」考」、都留文科大研究紀要第67集、二〇〇八年三月、都留文科大発行。

b 「統「なまよみの甲斐」考」、『文科の継承と展開』所収、二〇一一年三月十日、勉誠社発行。

2 平成二十四(二〇一二)年九月二十八日、山梨日日新聞社発行。

3 一九九六年十一月二十五日、集英社発行。

4 『釋注』の「並む」の捉え方について補足する。「筑波の岳に登りて、丹比真人国人が作る歌一首并せて短歌」(卷三・三八二〜三番歌)の長歌三八二の、「……二神の貴き山の 並み立ちの見が欲し山と 神代より人の言ひ継ぎ 国見する筑波の山を……」の表現の中の「並む」を考慮に入れば、「並む」は二つ以上のものが揃うことを表わすと言える。

5 甲斐の国の連山を詠んだ短歌や俳句に、次のようなものがある(山梨県立文学館所蔵資料に拠る)。

・連山がいく重の円を描く中の甲斐の国府のながき町かな(与謝野晶子)
・芋の露連山影を正うす(飯田蛇笏)

また、本稿も「並吉みの甲斐(交ひ)」の考察を基に、次のような歌を詠んでいる(先掲拙著『甲斐 万葉の歌譜』所収)。

四方の山配列の吉く幾重にも「交ひ」なす甲斐のうるはしきかな

受領日 二〇一九年九月三〇日
受理日 二〇一九年一月六日

